

あとがき

「二〇一七年五月末」という当初の計画より遅れたものの、『近代日本の対外認識』の二巻目を刊行することができ、まずはよかった、というのが現在の率直な感想である。一五年六月に『近代日本の対外認識Ⅰ』を出した時点で、今回の企画はスタートしていたが、歴史関係の論文集の場合、完成が大幅に遅れることは珍しくない。しかし執筆者のご協力のおかげで、無事に刊行にこぎつけられたことを心より喜ぶたい。

執筆者の顔ぶれについて多少の入れ替えを行ったけれども、本巻の執筆者も、全員が「歴史を学ぶ愉しみ」を共有してくれる」「それぞれの研究成果を読みたいと、われわれ（编者）に思わせてくれる」そして「全力でこのプロジェクトに打ち込んでくれる」方々であった。今回も数度にわたり、執筆者が一堂に会する中間報告会を開催し、長時間にわたり忌憚のない意見交換を行うことができた。また、『Ⅰ』でも試みたことだが、本年一月に提出された第一次原稿を、すべての執筆者に回覧し、率直なコメントをつけてもらうことで、さらなる質の向上をめざした。その意味で、この『近代日本の対外認識』シリーズは、執筆者全員が编者といっても過言ではない。

本シリーズに協力してくださった（编者を除く）二二名の執筆者は、いずれも相当の実力を持った——编者の視点からすれば「われわれよりも優れている」と感じられる——研究者である。今後、必ずや素晴らしい業績をあげていくであろう皆さんと、数年にわたり一緒に仕事ができたことを、编者として誇りに思うし、ぜひまた、新たなメンバーも加えて、共同研究を進める機会があればと考えている。

また『Ⅰ』のあとがきでもお名前を挙げたが、彩流社の高梨治さんには、感謝の念を捧げても捧げつくしきれない。よくもわるくも「口八丁、手八丁」な伊藤と、常識的ではあるものの「マイペース」な萩原、という二人の编者のあいだで、相当に苦勞をされたと察する。にもかかわらず、つねに温厚な態度で、スムーズに物事を進めていただいた。

高梨さんなくして、本企画は成功しなかった。あらためて御礼申し上げたい。

ここで、ふたつほど「裏事情」をお話したい。すでにお気づきのように『Ⅱ』では、編者の順序が『Ⅰ』と入れ代っている。じつは『Ⅱ』の企画がはじまってほどなく、私事による心労で伊藤が体調を崩し、編者としての仕事はおろか、みずからの原稿の執筆すら危い状態に立ち至った（本書の刊行が遅れた理由もここにある）。そのため、伊藤の精神的負担を軽くする目的も兼ねて、高梨さんとも相談し、『Ⅱ』において編集作業を主導的に進めた萩原の名前を、前に出すよう改めたしだいである。とはいえ「第二編者」となった伊藤も本年四月には完全に恢復し、以前と同じく「口八丁、手八丁」で校正や組版（本シリーズの組版は、伊藤が自ら手がけている）を精力的に進めていたので、要らぬ世話だった気もしなくはないが。

もう一つは『Ⅰ』と『Ⅱ』のあいだの、分量（章数）の不均衡である。両者はもともと、ともに九章編成で刊行される計画であった。ところが『Ⅰ』の編集過程で、よんどころない事情により、おひとりの原稿が間に合わないことが判明する。そこでやむなく、その方には『Ⅱ』の方に戻っていただき、第一巻は八章、第二巻は一〇章という変則的なかたちで出版することになった。そのためページ数や定価も不統一となり、読者をはじめ各方面にご迷惑をおかけすることを、ここにお詫びしたい。

いづれにせよ二巻合せて一四名の研究者たちが、みずから「歴史を学ぶ喜び」を堪能しつつ過程をへて生み出した「自信作」が本シリーズである。そこから読者も、同じ喜びを汲みとっていただければ、執筆者一同これに勝る喜びはない。

二〇一七年七月 編者記す